
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 63

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 1241. ダーウィンとマルクスからの励ましと明日への更新
- 1242. ひとつづきの夢
- 1243. 着実な更新
- 1244. 大海原を飛ぶ一羽の白鳥と世界の儚さ
- 1245. 部分と全体の子入れ構造としての「レベル」
- 1246. 一億文字の先に広がる認識世界
- 1247. I型人財からT型人財への育成に関するローテーション問題
- 1248. オンラインゼミナールの課題を作りながら
- 1249. この一年間の夕食とデカルトについて
- 1250. エネルギーの散逸とここから
- 1251. 世界と私:私と世界
- 1252. 散逸的な夢と統一体
- 1253. Preziを活用したプレゼン資料の作成
- 1254. 脳内感覚の変化と新たな規律
- 1255. 四つの内省段階:真の内省実践に向けて
- 1256. 冷夏に思う冬と環境による発達
- 1257. 人財育成に関する深い知識を獲得する必要性
- 1258. 近未来を訪れる夢
- 1259. 観察ではなく鑑賞を
- 1260. メンタルモデルについての再考

夜の九時に近づき、そろそろ今日一日の仕事を終えようと思う。その前に、最後に文章を一つ書き留めておきたい。

雨がしとしと降りしきる中、書斎の中を静かに流れるバッハの曲に伴奏するように、雨滴が書斎の窓ガラスに時折ぶつかる。今日一日を振り返ってみたときに、自らの探究に関して、ある誓約をすでに結んだはずなのに、焦る自分がいたことを省みなければならない。仮に今この瞬間の自分が、一つの仕事も形として残せていないとしても、決して焦ってはならないのだ。粛々と継続させていかなければならない営みがあることを、私は忘れてはならないだろう。

夕食後に読み進めていた論文の中で、チャールズ・ダーウィンが進化論を打ち立てるまでの、精魂を込めた探究姿勢に大きな感銘を受けた。その史実についてはすでに知識として私の内側にあったのだが、それを自らの存在を通じて噛み締めるような感覚に陥った。

ダーウィンがおよそ八年間かけて、生物の観察を愚直に続け、ただひらすらに観察ノートを書き続ける中で自らの概念や理論を磨き続けた姿勢に対して、大きな励ましを得たのである。実際には、概念や理論を磨き続けたというよりも、それは絶え間ない再構成の連続であったと述べた方がいいだろう。

この励ましは、カール・マルクスが『資本論』を執筆するまでの期間、足繁く大英博物館に通い詰め、その図書室で思索に打ち込み続けた史実から受けたものと同様の感覚を持つ。何度も何度も自らの概念を練り直し、再構成に次ぐ再構成を重ねていった結果として、後世に多大な影響を与えることになった両者の理論体系が結実していった。この励ましは、一人の探究者としてのあり方に関するものだけではない。一人の人間が真に人間として生き抜くことの根幹に触れることとして、この励ましがあったのだ。

『成人発達理論による能力の成長』の原稿を書き上げてから、およそ半年以上が経つ。あの書籍の大半の内容は、ここで書き留められている日記が原型になっている。原稿の執筆を終えてからの六ヶ月間、自分の中で様々な「更新」が行なわれている。あの書籍は、およそ15万字ほどの文字数で構成されている。

私は執筆を終えてから、毎月15万字ほどの文字をここに書き続けている。すなわち、書籍の執筆以降、あの書籍と同じほどの分量を持つ書籍を六冊ほど書き上げている計算となる。その過程は、自己批判に次ぐ自己批判であり、その中で絶えず新しいものを見出し、新たなものを創出していくような姿がその過程の中に刻印されているように思う。

第二弾の書籍は、ちょうど二週間ほど前に世の中に送り出されることになったが、その時点ですでに六回ほどの生まれ変わりを遂げているような印象を私は持つ。私は、これからも更新を続けなければならない。絶えず自分の内側から言葉を紡ぎ出すことを通じて、絶えざる更新を果敢に実行していく必要がある。それは、私自身が前に進む進まないの話ではない。新たに再構成し続けることの中に、自分の仕事と自己の存在そのものを位置づけるのだ。そのようなことを考えていると、人生は自己を「行進」させていくのではなく、自己を絶えず「更新」させていくことなのだと思う。

しとしとと降り注いでいた雨が勢いを増した。それに足並みを揃えるように、風の勢いも増した。今日という一日が終わり、世界の時間が明日に更新される時、私そのものも更新されることを強く願いながら今日の仕事を終えたいと思う。2017/6/30

1242. ひとつづきの夢

「更新」について記した昨夜から一夜が明けた。起床するのが少しばかりためられるような一日の始まりだった。だが、ひとたび起き上がってしまえば、また新しい一日の中に溶け込んでいくかのように、普段と変わらない一日が始まった。ここ数日間は、雨模様が続いており、寝室に朝日が差し込んでくることはない。そのため、薄暗い世界の中で早朝の活動を開始することとなっている。

昨夜の自分と今の自分を比較してみたときに、何か更新されているものがあるだろうか。それに対して、私は「ある」と答えたい。おそらくそれは、昨夜から今朝にかけての、夢を見ない深い夢の世界の中で起こっているものだと言えるだろう。昨夜は夢の中で、日本のとある神社を訪れていた。

それは靖国神社を思わせるような神社であり、私は神社へ入るための入場料を支払おうとしていた。この神社には似つかわしくない一階建ての小さなプレハブの建物が、入場料を支払う場所になっていた。そこで私は入場料の111円を手渡そうとした。すると、受付担当の男性から、「申し訳ありま

せん。ドルでお支払いすることはできないんです・・・」という言葉が返ってきた。私は誤って、1ドルと11円を差し出したようだった。私は謝り、すぐさま日本円を差し出した。

神社の敷地内に入ってみると、日本の夏を思わせるような暑さを感じた。そのため、私は着ていた服を全て脱ぐことにした。神社のような場所で、上半身裸になることは少しばかり良心に訴えかけるものがあつたが、この暑さではやむをえなかった。上半身裸になり、木陰に向かって歩いている時、私の汗ばむ背中を参拝客たちが眺めているのがわかり、それは気分の良いものではなかった。

しばらく木陰で休憩をしていると、一人の老婆が参拝をしている姿が目に入った。深々とお辞儀をし、何か大きな存在に対して信心深く祈るその姿に、私は釘付けとなり、その老婆の祈りに自らの祈りを重ねるかのように、その様子を静かに見守っていた。

老婆の祈りの一部始終を静かに見届けた後、自分も参拝するかどうかを迷っていた。というのも、神社に詳しい知人の方の話を思い出し、参拝することによって、これまでの自分に取り憑いていたものを取り払うことが起きたり、逆に、これまでにないものが取り憑くことが起きたりするということを聞いていたからだ。その二つの可能性の狭間で私は揺れていた。その葛藤はしばらく続き、服を着た私は、参拝しない決断をし、その場を後にした。

結局私は、今の自分に取り憑いているであろう存在を大切なものとみなし、それと共に歩いていくことを決意したようだった。神社を離れた私は、10人ほどが集まった小さな講演会場にいた。そこでは、日本の政治経済について歴史的な観点から意見交換することが行われていた。その講演を取りまとめていたのは、アフリカ系アメリカ人の男性であり、彼の講演は見事であった。

彼の日本語の流暢さは言うまでもなく、日本人ですら用いることができないような語彙を、それが全くの嫌味でないほどに、一つ一つの文脈に合致する形で紡ぎ出していく様は圧巻だった。彼の姿はまさに、鍛錬された知性を体現していた。

その講演の参加者はどなたも、私と年齢が倍近く離れており、学識はそれ以上に離れたものと理解していたが、講師役のアフリカ系アメリカ人の男性に積極的に質問をすることにした。今回の話題は、日本の政治経済に関する歴史的展望であり、それは過去と現在に関するものであったから、必然的に将来に関する点が気になった。

ただし、未来予測というのはほぼ当てにならないという前置きを据え、なおかつ話を経済に絞った上で、今後数年間の日本経済の動向について質問をした。もちろん私は、自分の前置きにあるように、特に経済という複雑な現象における未来予測の不毛性について理解していたが、時間軸を短めに設定すれば、人間の頭でもそれなりに妥当な予測説明が成立しうるのではないかと思っていた。だが、私の関心は実はそのようなところではなく、このアフリカ系アメリカ人の講師が、私の質問に対してどのような語彙をどのような形で組み立てていくのか、という一点に自分の関心があった。

彼の回答は、私が望んでいた通りのものであり、外国人が日本人以上に、日本語を自らの思考空間の中で美しく建築していくことが可能なのだということに、私は激しく感激した。そうした感動の余韻に浸っていると、夢の場面が変わり、私は学校の教室のような場所にいた。

大学時代の友人たちが教室の机に座っており、一方で、教室の前方には高校時代の担任教師が立っていた。私は仲の良かった大学時代の友人の隣に座ることにした。すると教師が、生活態度に関する質問票の話をし始め、どうやら期限までに提出していなかったのは私だけだったようだ。教師は、「お前はサッカー選手なのだから早く提出しろ」という言葉を私に投げかけた。

その時初めて、自分はサッカー選手という職業に就いていることを知り、同時に、この職業と質問票の提出期限を守ることの論理的つながりが一切理解できなかった。また、質問票の問いを見ると、傲慢ながら、それは自分が回答するに値しないものだとなり、仮に提出を望むのであれば、問いの日本語を全て適切なものに作り変えるように教師に訴えた。自らの主張を放ったところで、私は夢から覚めた。

三つの異なる一連の夢の描写が、一つの意味を持ったまとまりとして知覚される。最初の夢に関しては、昨夜の日記に書き留めていたことと関係があるだろう。また、二つ目と三つ目の夢に関しては、私が「多くの日本人の中に真の日本人を見ない」ことを嘆いていることと密接に関係しているようだ。同時に、自らが外国人として他の言語を学ぶことに関して、一つの希望を見出し、その希望が実現されつつあることを象徴しているものだったと言えるかもしれない。

あのアフリカ系アメリカ人が、大多数の日本人よりも真っ当かつ、日本文化に根ざされた美を真に体現させた日本語を話していたように、外国文化の根に宿る美を通じて他言語を構築していくこと

が可能になりつつある自分の姿を知った。だが、あのアフリカ系アメリカ人の次元に到達するまでには、私は随分と多くの道を歩んでいかなければならないだろう。2017/7/1

1243. 着実な更新

気づけば今日から七月に入った。七月という言葉聞けば、それは夏を私たちに喚起させるが、依然としてフローニンゲンの夏はそれらしきを見せない。先ほども、書斎の窓から外を見ると、パーカーを着て歩いている人を見かけた。家の中にいる私もそのような格好をしている。

先ほど私は、緊張感に満ち溢れた張り詰める冬の朝を懐かしく思った。それは間違いなく過酷な寒さなのだが、その過酷さが人間精神を凝縮し、密度の濃い粒子へと私たちの精神を変容させるかのように思える。そのような朝が懐かしく思えた。夏が終わり、短い秋が過ぎ去れば、そうした冬が自ずとやってくるだろう。

昨夜、ふとしたきっかけで、セルゲイ・ラフマニノフの音楽を聴きたいと思った。昨夜のうちにダウンロードした楽曲を今朝流してみた。このロシアの作曲家の曲は、間違いなくロシア的精神から生まれたものであり、先ほど聴き入っていた曲は、はち切れる寸前の糸が縦横無尽に張り巡らされたかのような冬の朝にふさわしいと思った。

そのようなことを考えていると、昨日の日記について思い返していた。昨日は、第二弾の書籍以降、自分が書籍の内容を更新するかのように、日々何かしらの文章を紡ぎ出していったことに言及していた。書籍の執筆が終わったのは、昨年12月末のため、そこからあの書籍の分量と同じだけの文章を六冊分ほど書き留めていることになる。第二弾の書籍が出版されて二週間ほど過ぎただけなのだが、それは六冊前の作品に思えてくる。

午前中、先日スピノザ記念館を訪れた際に購入した論文集“Spinoza Research: To Be Continued”を読んでいた。その中で、スピノザは誰かのために文章を書き留めていたのではなく、自らのために文章を書き続けていたことを知った。スピノザには、表現しなければならないことが内側に絶えずあり、それを外側に形として表現することが兎にも角にも重要であり、それは他者のためではなかった。今の私もスピノザと同じような発想で、日々文章を書き留めることに従事しているように思う。

これをしなければならない必然性が常に存在し、それはやはりひどく個人的な事柄に根差している。だが、第二弾の書籍は、ここで書き留められている日記から生まれたものであることに間違いないため、それが結果として他者に資するものに変容する可能性は常に残っているのだと思う。とにかく今日も一步一步の着実な更新を果たしたいと思う。2017/7/1

1244. 大海原を飛ぶ一羽の白鳥と世界の儚さ

崇高さや美しさというよりも、一点の曇りもない静けさが内側の世界に広がっていくようであった。一羽の白鳥が、その羽根をゆっくりと羽ばたかせながら、大海原を優雅に飛んでいる姿を初めて見た。

大海原の上を駆け抜けていくそよ風が、海面に静かな跡を残すように、静かな感動のさざ波が私を襲った。そして、大海原を眼下に見下ろし、優雅に空を飛んでいる白鳥が自分であることに気づいたのはしばらくしてからだった。

そのような夢を何年か前に見たことがある。先ほど、昼食を摂りながらこの夢を思い出していた。この夢を想起させるきっかけになったのは、食卓に流れるラフマニノフの交響曲第2番だった。私はいつもこの曲を聴くとき、とても不思議な気持ちに包まれる。

それは美しさを感じるその先にある、透き通った静けさをもたらす感情である。数年前に、夢の中にこの曲が流れ、私はこの曲と一体化するようなことがあった。この曲と一体となった私は、自らが白鳥に変容し、大海原を優雅に飛び回る旅に出かけたことがあった。穏やかな大海原の海面に太陽光が反射し、海面がきらめいている姿を私は見た。

またそのきらめきが、海面の上を優しく駆け抜ける風によって揺らめく姿はとても感動的だった。ラフマニノフのこの曲は、数年前の感動的な夢を再び私に見せてくれるかのようにだった。

食卓の窓から外を眺めると、犬の散歩をしている女性の姿を見かけた。飼い主に連れられている犬はとても小さく、飼い主の一步の歩幅に対して、何歩も何歩も次々と足を前に繰り出していた。その様子は実に愛らしく、それを見ていた私は思わず笑みをこぼした。そこでもまた、人間が生きていくこととは何なのかについてぼんやりと考えていた。

今この瞬間に聴こえているラフマニノフの曲のように、未来永劫にわたって残り続けるもの。その一方で、形になることなく消え去ってしまうもの。それらの双方が、私たち一人一人の人生を支えているように思えた。私はなぜか、形になることなく消え去ってしまうものだけではなく、永遠を獲得したはずのものに対しても、儚さのようなものを感じていた。

この儚さは、否定的な感情や意味合いが伴うようなものではなく、それこそが人間の真の姿を表し、人間の仕事の本質を表しているように思えた。先ほど眺めていた小型犬の歩く姿は、私の内側に強い印象として残っている。だが、それは儚く消え去ってしまうものに違いはない。一方で、それを言葉の形としてここで書き留めたがゆえに、それは永遠に至る資格を獲得したかのように思える。

確かに、私が感じていた印象は文字として永遠に残るだろう。しかしながら、永遠性を獲得したかに思える文章が、対象とした現象が自分の内側を通り過ぎていった際の儚さと同質の儚さを引き起こすのは何故なのだろうか。

形のあるものも形のないものも、永遠のものも一瞬のものも、それらが等しく儚さを引き起こすことの背後には、全てのものが儚さを本質に持っているからではないかと思った。この世界は儚さから生まれ、儚さで作られているのかもしれない。2017/7/1

1245. 部分と全体の入れ子構造としての「レベル」

早朝の天気とは打って変わり、午後から快晴が広がり始めた。昼食を摂り終えた私は、論文を一本読み、いつもと同じように20分の仮眠を取った。昨日と同様に、それは深い休息をもたらすような仮眠であった。そのわずかな時間において、私は夢を見ない深い眠りの世界に沈んでいき、そこで限らない休息を経験していた。

こうした仮眠をもたらしたのは、ここ最近の私の探究生活から見れば必然かもしれない。深い休息を取ろうとする意識が自然と現れ、それがこうした休息をもたらしてくれたのだろう。深い休息を伴う仮眠の後、多くの場合、時間感覚が消失し、仮眠から目覚めた直後は、まだその日であることに驚くことがよくある。同時に、夢を見ない深い眠りの意識の中で消失していた小さな自己が、再び活動を始める際の、あの何とも言えない自己消失と自己連続の感覚は、未だに不思議な感覚として知覚される。今日もそのような体験をした。

仮眠から目覚めると、見事に晴れ渡った空に気づき、私は嬉しくなった。私の気分も自然と晴れ渡り、午前中の続きとして、論文をいくつか読み進めていた。早朝にスピノザの論文集を読み終えた私は、デイヴィッド・ウィザリントンの論文を読み始めた。ウィザリントンは、発達科学と複雑性科学を架橋するメタ理論の研究に従事している研究者であり、彼の論文はいつも示唆に富む。

午前中から夕方にかけて、彼の論文を五本ほど読み、中でも“Embodiment and Agency: Toward a Holistic Synthesis for Developmental Science (2013)”は大変洞察に溢れていた。この論文では、発達現象を説明する複数の思想的立場を取り上げ、それらがどのような還元主義に陥っているのかを指摘し、それらの限界を乗り越える思想的立場をいくつか紹介し、それらの思想立場についてもメタ的な比較検討を加えている。

正直なところ、発達現象を捉える前提となる思想的立場について基礎的な知識がなければ、この論文を読むことはできない。「有機体的発達思想」「機械論的発達思想」「文脈主義的発達思想」などの思想立場を理解し、さらには、ダイナミックシステム理論を適用したエスター・セレンやリンダ・スミスの思想的立場を理解していることが、この論文を読む出発点となる。

午前中から夕方にかけて読んでいた四本の論文とは異なり、この論文を読み進めるのは想像以上に時間がかかった。今後、発達科学と複雑性科学を架橋するメタ理論的な論文を執筆する際に、この論文は必ず引用文献の一つになるだろう。この論文を読みながらふと考えていたのは、複数の発達思想を比較検討するような極度に抽象的なテーマではなく、第二弾の書籍『成人発達理論による能力の成長』でも取り上げた、「レベル」という概念についてであった。

この概念は、カート・フィッシャー以前のピアジェ派やピアジェ派においては、「発達段階」という概念で捉えられている。先日、日本人の知人の方から連絡を受けたが、どうも日本の教育研究者や実践者の中には、ピアジェが最も初期に提唱した発達段階モデルしか触れていないためなのか、レベル(あるいは「発達段階」という概念を毛嫌いする傾向にあるようだ。

この点については、以前の日記にも紹介したように思うが、その時に言及していなかったこととして、発達科学で言う「レベル」という概念は、質的差異のことを示し、それは部分と全体の入れ子構造のことを指す。仮に、レベルという概念を真っ向から否定するのであれば、こうした入れ子構造の存在

そのものがないものとして扱われてしまう。こうした部分と全体の関係性は、米国の思想家ケン・ウィルバーが指摘しているように、私たちのリアリティを構成する最も重要なものである。

実際に、部分と全体の関係性は至る所で見られ、原子と分子の関係性というのはまさに最たる例であり、それと同様の関係性が、人間の器や能力の成長においても見られるのだ。拙書の中で紹介した、富士山の例を用いると、地上から山頂までを一つの大きな全体と捉えた際に、山頂に至るまでの一つ一つの山の地点は部分となる。

そして、五合目は全体の山から見た場合の部分に過ぎないが、五合目は一合目からその地点までの一つの全体として存在している。仮にレベルという概念を認めないのであれば、成長や学習において、私たちは山のどこを歩いているのかを見失ってしまうだろう。また、山のどこかの地点でつまづいた際、その人物がどの地点にいるのかを見極めることをしなければ、救助も支援も成り立たないだろう。レベルの存在を認めるというのは、部分と全体の入れ子構造を認識することであり、そうした認識があつて初めて、正しい支援策や介入方法が成立するのではないだろうか。2017/7/1

1246. 一億文字の先に広がる認識世界

昨日はあれこれと多くの論文を読み、その他の仕事を通して、一日中、文字情報と向き合うような日であった。そうしたこともあり、何かが過度に蓄積されているような重たさを心身に感じたため、昨夜は少しばかり早く寝ることにした。すると、こういう日に限ってか、新しく移ってきた一階の住人の自宅でパーティーのようなものが催され、人の声が夜中まで途切れることはなかった。結果として、私が眠りの意識に落ちたのはいつもより遅くなってしまった。

しかし、早い時間から横になるだけでも随分と心身に与える影響は違うようであり、起床直後の私は、再び何かが充電されているような感覚に包まれていた。今日は午前中に雨が降り、午後からは曇り空に変わるそう。このような日曜日はやはり、書斎で論文や専門書を読むことに限るだろう。それに加え、協働で仕事を進めている方と午前中にオンラインで会話をし、午後からは他の協働プロジェクトの仕事を進めたいと思う。

昨日の夕方、仕事の手を止め、窓越しにぼんやりと景色を眺めていると、これからの自分は、どれだけ日記という形式で文章を書き残すことができるのだろうか、ということを思った。これと似た様な

問いは、以前にもフローニンゲンの街中を歩いている時に湧き上がっていた。現在、特に意識をすることもなく、何かに駆られ、必然的に毎日五千字ほどの日記を綴っている。先日世の中に送り出された『成人発達理論による能力の成長』の文字数は、およそ15万字であったから、毎月それに匹敵するほどの日記を書き留めていることになる。

仮にこれからの50年も、同様の分量の日記を書き続けていけば、600冊ほどの日記となるだろう。実は、このような数量計算をふと行ったのは、去年の夏に出かけた欧州小旅行の時だった。あれはおそらく、ドイツのリアーからハノーファーに向かう列車の中の出来事だったと思う。ハノーファーに向かう最中、ある時、車窓から一つの古城が見えた。

その古城をぼんやりと眺めていると、「一人の人間が一億文字を外側に表現した際に、どのような認識世界が広がるのだろうか？」という問いが生まれた。その問いが生まれた時、実際に自分でそれを行い、自らの存在をかけて確かめてみたいという蠱惑的な衝動が芽生えた。言ってみればそれは、ある止むに止まれぬ衝動との同一化であり、それに逆らう手段など私にはなかった。

また、一億文字を表現した後に広がる認識世界というものが、これまでとは何ら変わらぬものであったとしても、その徒労を積極的に引き受けようとする気概のようなものがあつた。いや、これまでと何ら変わらぬ認識世界であるはずはないという確信めいたものがその時にあり、一億文字を表出して初めて広がるであろう認識世界に対して、不気味な関心を持っていた自分がいたのである。

ハノーファーに向かう列車の中、私はこの試みに着手したいと静かに思っていた。今後私は様々な形式の文章を書くことになるかもしれないが、本音で言えば、表現形式は英語での学術論文と日本語での日記の二つに絞りたい。一億文字を紡ぎ出していくという試みを静かに進行させていく傍らで、学術論文を書き続けたいと思う。一億文字を外側に表現した際、その人間の認識世界はどのようなになるのか本当に気になる。2017/7/2

1247. I型人財からT型人財への育成に関するローテーション問題

昨夜はいつもより早く就寝をしたおかげもあり、早朝の思考の有り様がここ数日のものとは異なることに気づく。それは文章を書いている時に明確に現れており、一つの機械が淡々と動いていくかのような非人工的な運動を自分の思考の中に見て取ることができる。

一人の人間の思考というのは、間違いなく開かれたシステムだと思うのだが、今日の自分の思考は、閉じられたシステムのように思える。機械論的な世界の中で、閉じられたシステムが一つの動作から次の動作へと、論理的必然性を持って動いていくような思考がこの瞬間の自分を支配しているようだ。このような自分の有り様に関しては、いつものように一切の価値判断を入れず、「そのような日であり、そのような朝なのだ」という言葉を述べたくなる自分がある。その点については普段と変わらない。

ふと、先週末に行われた、インテグラルジャパン代表の鈴木さんとの出版記念対談について思い返していた。その対談の前に、少しばかり雑談として、近年、日本の企業社会の人財開発の中では、ローテーションの問題が浮上しているとのことであった。具体的には、I型人財からT型人財への成長を支援する上で、どのタイミングで他の領域の経験を積ませるのかという問題である。また、最近では、一つの専門性を持ち、幅の広い知識を獲得しているT型人財から、二つ以上の専門性を持っている「 π 型(パイ型)」人財を育てる必要性も顕在化しているようだ。

ここで問題となるのは、一つの専門性を確立しようとする人が、他の領域に移行する時期があまりに早い場合、I型人財にもなることができず、そのタイミングを測定することが難しいという論点である。この問題に対する方策の一つはまさに、能力の専門性度合いを的確に測定することにあるだろう。

これは私がマサチューセッツ州にある研究機関レクティカに在籍していた時に、そこに在籍している研究者との話を通じ、また実際に研究データを眺めてみた時にわかったことだが、一つの専門性領域を確立し、その能力を実務の中で発揮できるようになるためには、その領域の能力レベルが少なくとも11を超えていなければならないということだった。

レベル11(システム構築レベル)の説明については、拙書『成人発達理論による能力の成長』に譲るが、この能力レベルを客観的な基準として、専門性の確立の有無を判断していくことは有益に思われる。ただし、レベル11というのは専門性の土台が確立された段階にすぎないため、ここで他の領域にローテーションをしてしまうことは問題がある。

レベル11に到達した段階でローテーションをかけられてしまった場合、その専門領域の発想の枠組みや方法に縛られ、他の領域の関係者と相互理解を図りながら真の意味での協働作業をしていく

ことが難しいだろう。その結果として、幅広い知識と経験を獲得することができず、T型人財に変容していくことは起こりにくいと考える。

これは若干細い指標だが、ローテーションをかけるべきタイミングは、その人が自分の専門領域の能力レベルを11.5あたりにまで伸ばした時であろう。このレベルに至れば、レベル12(メタシステム構築レベル)の特性の一つである、自分の専門領域の発想の枠組みや方法の限界に自覚的であり、他の領域の発想の枠組みや方法を積極的に取り入れようとするあり方が芽生える。こうした特性はまさに、一つの専門領域から離れ、幅広い知識と経験を確立し、他の専門領域の関係者と協働する上で重要になるだろう。上記の論理を用いれば、客観的な基準をもとに、T型人財から π 型人財へ育ったか否かの判断を行うこともできるだろう。

ここで簡単に紹介したことを実務の世界で実現させていくには、少なくとも1-2年ほどの時間がかかるだろう。というのも、上記のような判断は、決して360度評価のような、印象に左右されやすく、能力の質的差異を捉えることのない測定手法に依存してはならず、客観的なアセスメントを開発しなければならないからである。

これまでの経験上、専門性の能力レベルを測定するためのアセスメント開発には、データの収集と分析や関係当事者との協働作業などを含めると、やはり1-2年ほどの時間がかかる。だが、ローテーションの問題を解決し、長期的な視野を持って人財育成を行うのであれば、こうした1-2年の労力はあつてしかるべきものだと思う。2017/7/2

1248. オンラインゼミナールの課題を作りながら

早朝は小雨が降る時間帯もあったが、午後以降、天気は回復し、夕方の今は晴れ間が広がっている。今日は午前中に、Skypeを通じて、これまで共に日本企業の組織開発に携わってきた方と一時間ばかり話をした。一時間という短い時間でありながらも、お互いの近況を伝え合うことができ、私にとってはとても貴重な時間であった。昼食前から午後にかけて、『成人発達理論による能力の成長』の出版を記念したオンラインゼミナールの事前課題の作成に取り掛かった。

オンラインゼミナールの形式で発達科学の知見を紹介していくのは、今回をもってしばらく控えようと思う。これは自分の身边を取り巻く諸々の事情による。その中でも最も大きい理由は、自分の仕事

のあり方と進め方に関するものだろう。もちろん、私を取り巻く状況が変化し、オンラインゼミナールに関する考え方が変われば、今後また何らかの機会にそうした場を設けたいと思う。

しかし今のところ、そうした日がやってくるのは数年後かもしれないと予感している。今回のゼミナールにおいては、特に出版した書籍に対する内容を多角的に深められるような課題を練ろうと思っていた。

昨日と今日において、各クラスの課題を少しずつ作っていった。受講してくださる方の知識と経験、そして関心も異なるため、事前課題の問いを設定することは簡単なことではない。今回も、簡単な問いというのは一つもないのだが、それでいて難解すぎず、書籍の内容とこれまでの自分の知識と経験を活用すれば、何かしらの回答がひねり出せるような問いを設定することになっている。

これらの問いについては、書籍の中で盛り込むことのできなかった論点と関係しており、私自身が回答して有意義だと思うような内容になっており、同時に、受講生の方の回答が楽しみに思えるような内容になっている。先ほど、とりあえず全てのクラスの事前課題を作成し終えたため、少しばかり問いを寝かせておこうと思う。

事前課題の問いについてひと段落すると、先日行われたインテグラル・ジャパン代表の鈴木さんとの対談について改めて思い返していた。対談の中で、今回の書籍に盛り込めなかったことについて尋ねられた時、それを一つに絞ることはできなかった。正直なところ、今回の書籍を通じて紹介できたことの方が少なく、紹介できなかったことの方が圧倒的に多い。とりわけ、私が直近の数年間に探究を進めていた、ダイナミックシステム理論や非線形ダイナミクスに関する概念や理論はほとんど紹介できなかった。

もちろん、それは日々、現在進行形で探究を続けている分野であるだけに、自分の中で未消化なものが多いことは確かである。ある意味、今回の書籍は、複雑性科学を母体としたダイナミックシステム理論や非線形ダイナミクスに関する発想の枠組みを今後紹介していくための、基本書になればと願って執筆したという事情がある。

人や組織、そして私たちの社会を非線形的かつ動的なシステムと見立てることによって、それらへの関与の仕方が変容することになるだろう。今回の書籍以上に、個人や集合を取り巻く成長のあり

方に関する問題意識を広く・深く持ち、そうした問題意識を共有する形で、具体的な問題の解決に向けた実践を促すような書籍をまたいつか執筆できればと思う。

夕食前と夕食後にこれから読む、森有正著『デカルトとパスカル』やデイヴィッド・ウィザリントンの“Self-Organization and Explanatory Pluralism: Avoiding the Snares of Reductionism in Developmental Science (2014)”は、まさに次の書籍の執筆に向けた重要な一歩となるだろう。2017/7/2

1249. この一年間の夕食とデカルトについて

初夏の太陽の愛情を注がれて育った赤々とした大きなトマト一つ、みずみずしいセロリ一本、北欧を彷彿とさせるニシンの酢漬け一匹。この一年間の私の夕食のほとんどは、その三つだけだ。昼食時に多めのサラダを摂る時に、有機穀物で作られたパン一枚と行きつけのチーズ屋で購入したチーズを少々食べなければ、夕食時にそれらを食べることもあるが、基本的には上記の三つの食物を摂るだけで私の夕食は終わる。

特に節制を意識しているわけではなく、それは本能的に必須の食生活だと思っている。私の本能が求めるのは、食欲を満たすことではなく、必然的に過食をすることではない。結局、自らの存在を保つのは、思考と感覚に裏打ちされた探究にあるのであって、そうしたことを可能にする際に、多くの食べ物を胃に入れておくことでは賢い行為ではない。私は「食」というものを非常に重要視しているが、それは決して多くのものを食べることにあるのではない。

自ら必要とするものを必要最低限に摂取することが何より重要なのだと思う。過食により身体を鈍重にすることは、精神を鈍重にすることにつながり、それは自己の存在そのものを鈍重なものにすることにつながる。今の食生活のお陰で、私はこの一年間、絶えず読み、絶えず書くだけの肉体的・精神的持続力を得られているように思う。

夕食後、森有正先生が執筆された『デカルトとパスカル』の最初の章を読んだ。この書籍は、一昨年に日本に滞在していた時に購入したものであり、以前から読みたいと思っていたが、なかなか手をつけることができなかった。今、ようやくこの書物と向き合う時が来たのだと思う。私は、森先生の

他の書籍を通じてデカルトをより深く知ることになり、これまで抱いていたデカルトへの印象を打ち壊し、再構成していくような試みを促された。

ただし、先生の他の書籍を通じて断片的にデカルトの思想やあり方について知ることには限界があり、今日から時間を確保しながら一章ずつ本書を読んでいくことにした。他の偉大な哲学者と同様に、デカルトもまた、自らの生と思索が深い次元で一致していた人物であったことを知る。特に、彼の「懐疑」という探究方法は、概念的な探究方法だったのでは決してなく、実存的な探究方法だったということに感銘を受けた。

欧州で生活を始めて以降、私は何度も何度も「自己批判」という概念と向き合わざるをえない状況に置かれ、自己批判を通して、その概念が持つ深い意味を掴もうとしていた。デカルトが、懐疑という実存的な自己否定の本質に、徹底的な自己肯定を見出していたことは、私にとって励ましをもたらすものであった。そして、徹底的な自己肯定に裏打ちされた懐疑を通じて、デカルトは、自己に自己の存在を通じて絶えず規律を与え、精神の陶冶を不断に試みていった。その姿には打たれるものがあつた。

また、そもそもデカルトが思想家としてそのような態度で思索活動に従事することになった決定的な契機が、ある日の夢による啓示であつたことを知った。1619年11月10日、若き日のデカルトを不意に襲った、連続する三つの啓示的な夢がデカルトを探究に駆り立て、探究を通じてこの世界を生き抜くことを決定付けたことを知った。

この史実を知ったとき、デカルトは、人知を越えた存在に導かれるようにして、探究の世界に参入せざるをえなかった人間だったのだとわかった。デカルトの思想体系に触れる際、こうしたデカルト本人を掴んで離さない実存的な主題を理解することできなければ、彼の思想を掴んでいくことなど全くできないと思われる。

デカルトの思想体系に熱いものが込められているように感じ始めたのは、彼の思索のあり方が、徹底的なまでに自身の生の深い部分に根ざされていたからなのだと思う。2017/7/2

第二弾の書籍『成人発達理論による能力の成長』が出版されて以降、何かとエネルギーを様々な方面に使わざるをえない日々が続き、自分のエネルギーが気づかないうちに減退しているようだった。それを象徴するかのように、昨夜から今朝にかけて10時間ほどの睡眠時間を取っていた。書籍が世に送り出されて二週間以上が経ったのであるから、そろそろ書籍の動向を静観する方向に移っていきたい。

書籍を執筆している最中は、そこにエネルギーの消費という感覚がなかったために、エネルギーの減退を感じることはなかった。むしろ、文章を書けば書くほどに、自らのエネルギーが充実していくような感覚があった。一方、今の状況はそうではない。エネルギーの散逸が見られ、この状況には早期に手を打たなければならないだろう。

実は、昨夜の段階ですでにこのことを思っていたのだが、実際に大量の睡眠を取っていたという事実が、その重要性を強く知らせた。とりあえず、この件を一区切りとし、これからは書籍の様子を静かに見守ることとしたい。見守るというよりもむしろ、できればこの書籍のことを忘れる形で日々の仕事に再度打ち込みたいと思う。何かのきっかけで書籍について思い出した時に、その様子を確認するぐらいの方がちょうどいいだろう。

最近の日記で書き留めていたように、この書籍が出版されてからも、すでに更新運動が自分の内側で継続しており、あの書籍はすでに六回ほどの更新を経ている。これからもこの更新運動を続けていくことが、自分に課せられている重要なことである。書籍を取り巻く状況にエネルギーを消費するのではなく、絶えず読み、絶えず書くという生活の中で、自らの英気を養っていききたい。

今朝はいつもより随分と遅く起床したため、起床直後から、この世界がすでに活動を始めていることがわかった。それは外の景色に如実に表れており、太陽が完全に昇り、通勤や通学で通りを行き交う人々の姿が見える。小鳥の鳴き声も、早朝の早い時間帯に聞こえる活動に向けた鳴き声から、活動が少し落ち着いた後の旋律と音階を持っている。世界の始動から少し遅れはしたが、私も今から、この日一日に自分がなすべきことをなしていこうと思う。2017/7/3

私は改めて、自らの言葉を紡ぎ出すことによって日々支えられ、それによって何とか存在の均衡を確保しながら前に進めているように思った。それは今、自転車で通りを過ぎゆく通行人の姿がきっかけとなって思ったことである。

七月に入り数日が経った。以前書き留めていたように、七月は年間を通してフローニンゲンの気温が最も高くなる月である。しかし、今朝も相変わらず涼しい。通りを行き交う人たちは一様に、ジャケットを羽織っている。部屋の中にいる私も上に何かを羽織っていなければ、寒さを感じてしまう。これが北欧に近いオランダ北部の七月の様子である。

文章を書き続けることは、自らを支え続け、自らを励ましながら歩みを前に進めていくことにつながっている。書籍の出版後に襲ったエネルギーの拡散現象を対象化し、そこから方策を導いていくことができたのも、文章を書き留めていたからだ。呼吸が途絶えることのないように、文章を途絶えることなく書き続けたいと思う。

それは、呼吸が途絶える瞬間まで文章を書き続けていたいという自分の強い思いと合致している。それはもはや思いというよりも、存在の声であり、魂の願いですらあるように思う。ここに、呼吸や食物を摂取するという、生命活動の維持に必要な事柄全般と書くことの重要性が完全に合致している感覚を持つ自分がある。絶えず書き、絶えず書きながら、自己の治癒と鍛錬を継続させていくということ。それをこれからも続けていく。

起床してそれほど時間が経っていないためか、この世界の動きにまだ慣れていない感覚が全身を包んでいる。同時に、全身の感覚を通じて入ってくるあらゆるものがとても新鮮に感じる。それは例えば、今この瞬間に目に入っている、早朝の太陽光に照らされ、そよ風に揺られる新緑の木々や、書斎に流れるショパンのピアノ曲などである。何か対象を絞って見るのではなく、見ることなしに書斎の窓から広がる景色をぼんやりと眺めていた。

仮に、自宅が最上階にあったのであれば、オランダの平坦な地形上、自分の視線の先にどこまでも続く景色が見れるのではないだろうか、という思いが湧き上がった。私は、この平坦な大地を持つオランダという国で、平坦ではない人生を過ごしている。「起伏に富んだ人生」と言えば、それは聞こ

えがいいかもしれない。しかし、そこには安易に語ることを許さない厳しさのようなものがあることは間違いない。

外から室内に流れ込む風が寒く感じられたため、私は書斎の窓を閉めた。しかし、私は自らの存在を外側に対して閉じてはならないことを知る。自己を外側の世界に開きながらも、なお一点の自己の存在を大切にしなければならない。外側の世界に自己を不用意に開いてしまったばかりに、自己が雲散霧消してしまっている現代人がいかに多いかについて、嘆きに似た感情が少しばかり起こった。

書斎の窓の窓枠が、一つの額縁となり、外側の世界が生きた絵画となっている。この絵画の書き手は誰なのだろうか。とっさに私は、この絵画の書き手は自然そのものであり、創造主と形容できる存在だと思った。しかしながら、そのとっさの考えをさらにとっさに打ち消すように、この絵画の本当の書き手は、創造主と自分に他ならないことに気づいた。これがおそらく、世界の中に存在し、世界に関与し続ける自己の本質なのではないだろうか。2017/7/3

1252. 散逸的な夢と統一体

散逸した精神エネルギーが統一性を取り戻そうとするかのように、昨夜はいくつかの連続した夢を見た。昨日は、私の精神エネルギーが拡散し、それが夜の睡眠の間において、一気に新たなまとまりになろうとするかのようにであった。

精神エネルギーが無秩序に散逸したのと同様に、昨夜の夢の内容も散逸的であり、その順序を適切に思い出すことができない。とりあえず、記憶にある断片的な事柄を書き留めておきたいと思う。まず印象に残っているのは、私がある山の中腹部あたりで父方の祖母と会話をしている場面だった。ドライブとして一つの高い山を登っていく経験があれば、誰しも一度は車を止めて立ち寄ったことがあるであろう、見晴らしの良い休憩地帯で、祖母と私は会話をしていた。

そこには、薄い青空が広がっており、ちぎれ雲がいくつか浮かんでいた。そのちぎれ雲は、私の手の届く距離にありそうに思えた。過ぎゆくちぎれ雲を見ながら、私は祖母の言葉に耳を傾けていた。「大学にいることは大切だけれども、そこから社会だね」という祖母の優しい言葉が印象に残っている。

話し言葉を書き言葉にした途端、また、前後の文脈を無視する形でその一言だけを切り抜いた瞬間、その言葉が意味することを掴むのは難しいかもしれない。しかし、その言葉を聞いていた私は、祖母の言葉が意味することを全身を通じて理解していた。

見晴らしの良い休憩所を流れる風が強くなり、ちぎれ雲が足早に過ぎ去っていった。夢の第二幕は、プロイセン王国とゾンビに関係する内容であった。この夢は、完全に映像が断片化してしまい、一連のストーリーを思い出すことができない。ただし、両眼のくり抜かれたゾンビがそぞろ歩きをしている姿を見かけ、私はそのゾンビと対話をしていたことは確かである。話しかけることを薄気味悪いと思うこともなく、私はそのゾンビから何か重要なことを教えてもらっていたように思う。

そのゾンビの姿と対話内容を思い出そうとしていると、その直後に、私は以前住んでいた寮にいる友人と遭遇し、日本橋にある編集社に今から行く必要があることを伝えた。歩いてそこに行くと一時間ほどかかるため、友人は親切にも、彼の自転車を貸してくれると述べた。私は、彼の厚意に甘えることにした。友人は、寮の自分の部屋の入り口に自転車の鍵があるから、それを取って自転車を自由に使ってくれ、と述べた。

彼が住んでいた部屋番号は402だった。友人の部屋に到着すると、すぐさま自転車の鍵を見つけた。彼の自転車は、寮の一階にあるようだった。一階の狭い通路に自転車が停められており、その狭い通路に入る際に、自分の体を横に向けなければならなかった。

自転車の腰掛けたところで、通りを歩く見ず知らずの人が、日本橋の付近は自転車の盗難が多発している、ということを私に述べた。それを聞いた時、私は、この人は日本橋を米国の治安の悪い都市の一角だと誤解しているのではないか、と思った。だが、友人から借りていた自転車が盗まれてはならないと思ったため、私は結局、走って目的地に行くことにした。

夢の終わりに、プロイセン王国の設立に関して、極めて重要な洞察を得ただけが記憶に残っている。これらの一連の夢は、明確な関連性を持たず、散発的に思えるが、それらは間違いなく何かによってつながっているような気がしている。それは、無意識の世界を貫く統一性がもたらすものだと言っていいかもしれない。こうした統一性がもたらすものによって、夢から覚めた私の精神エネルギーは、また一つの新たな総体として機能し始めたようである。2017/7/3

今日は午前中に、“Prezi”というプレゼン資料作成ソフトに関するウェビナーに参加した。Preziを活用しようと思ったのは、五月にフローニンゲンで行われた国際学会に参加した際に、ある研究者が私に勧めてくれたからである。その教授の実際のプレゼンを見ることはできなかったのだが、準備の段階で、Preziを活用することによってもたらされる視覚的な効果がとても魅力的に映った。特に、説明資料の動きが人間の脳と親和性があるのではないかと思われた。

そのため、オンラインゼミナールの中でPreziを活用すれば、受講生の学習効果が向上するのではないかと考えた。そうしたことから、今朝は一時間ほどのウェビナーに参加していた。

私は、これまで一度もPreziを使ったことがなかったのだが、一時間のウェビナーの内容が素晴らしく、説明を聞きながら、自分でもすぐにプレゼン資料を作ることができると確信していた。ウェビナーが終わるとすぐに、出版記念ゼミナールに向けた資料を作成してみることにした。ウェビナーの説明を見ていて感じていた通り、Preziの資料作成は、自分の感覚に忠実に従う形で進めていくことができる。別の表現で言えば、まるでマインドマップを作成するかのように、プレゼン資料を作成していくことができるのだ。

感覚的な操作が可能であることは、私にある種の快感をもたらし、結局そこから七時間ほどPreziを使って資料を作成していた。文字通り、Preziを活用するのは今日が初めてであり、使い方の説明を一時間受けただけであったから、最初のうちは不明な点もいくつかあった。しかし、そうした不明点も、自分で試行錯誤しながら解決をしていき、第一回目のクラスで用いる説明資料のほとんどを無事に作成することができた。明日は、今日取り掛かる予定であった論文の執筆を行いたいため、Preziに触ることはないだろうが、明後日はまたPreziを活用して資料の続きを作成したい。

本日、長時間にわたってPreziを活用したためか、自分の視覚がいつもとは異なる感覚がしている。実際に、PC上で資料を眺める際にも、Preziの特徴的な機能であるズームインやズームアウトをしようとするような脳内感覚が残っている。Preziには、まだ私が活用仕切れていない機能があるようであり、明後日はそれらの機能を試しながら、より学習効果の高い説明資料を作成していきたいと思う。

2017/7/3

昨日は、出版記念オンラインゼミナールに向けて、一日中説明資料を作成していた。その際に、プレゼン資料作成ソフトのPreziを活用していた。昨夜の日記で書き留めていたように、Preziが非常に感覚に訴えかけるような操作性を有しているためか、それを長時間使っていると、私の感覚が変化するようであった。昨夜の就寝前は実際に、普段活用していないような脳内感覚が刺激され続けた状態にあった。

脳内の諸々の部位が活性化され、眠りの意識に落ちる直前まで、私はイメージの世界の中で資料を作成していた。脳を酷使するような一日の後は、決まって脳内の情報を整理するような夢を見るのだが、昨夜は記憶に残るような夢を見なかった。また、昨夜は就寝前の一時間の休憩を取ることもなかったのもので、起床直後に心身が完全に回復しているかどうか若干の懸念があった。しかし、そうした心配も杞憂に終わり、今朝は非常に調子が良い。

やはり、昨日の資料作成というのは、ある種の快感状態の中で行われていたためか、自らの心身が心地よいと思うような実践であれば、それに長く従事していてもほとんど問題がないことがわかる。それよりもむしろ、心身が活性化されるような感覚があったため、それは肯定的な体験であると受け取った方がいいかもしれない。いずれにせよ、内容は異なれど、日々の仕事を常にそうした感覚の中で取り組みたいと思う。

昨日、自らの規律を見直したように、出版された書籍に対して注ぐ精神エネルギーの量が変化した。これは意図的に変化させた、と言った方がいいだろう。第二弾の書籍が世に送り出される前後において、書籍を取り巻く状況の中に埋没し、本来自分がなすべき仕事に打ち込めていなかったように思う。こうした状況にいつまでもいてはならないという思いから、どこかで区切りを付ける必要があった。それが昨日だった。

自らのエネルギーが書籍を取り巻く状況の中で漏洩していることに気づいた私は、それに気づいた段階で手を打とうと思った。その策については、具体的に記載することはしないが、いくつかの行動指針を自分なりに作り、それらの指針に則った行動を昨日から心がけるようになった。

昨日は、まさに新たな行動指針に沿った行動を取ることができていたがゆえに、自分のなすべき仕事ははかどったように思う。フローニンゲン大学での新たな学期が始まる九月にまた、別の重要な行動指針を設ける予定であり、それは諸事情により現在従うことはできないのだが、それに則った生活を始める九月の二週目からは、再び完全な形で自らの仕事に打ち込むことになるだろう。

今日も絶えず読み、絶えず書くことを通じて一日を形作りたい。午前中の仕事の終わりから午後の時間を使って、今日は論文の執筆に従事する。2017/7/4

1255. 四つの内省段階:真の内省実践に向けて

第二弾の書籍『成人発達理論による能力の成長』について、改めて振り返っていた。昨日は、本書の出版を記念したゼミナールに向けて、説明資料を作成しており、その過程で本書の全体を再び自分で読み返すことをしていた。中でも、第五章の中で取り上げた「リフレクション」について、また異なる観点から考えていた。本書では取り上げることはなかったが、内省能力の成長に関しては、パトリシア・キングとカレン・キッチナーの研究が最も有名だろう。

内省能力の成長について、二人が提唱した七つの段階モデルは、私自身、米国の大学院に留学していた際によく参照していた。七つの段階について一つ一つ説明することをしないが、現在の日本を取り巻く内省実践を眺めてみると、七つの段階特性をまた異なる観点から分類し直すことができるように思える。具体的には、日本を取り巻く内省実践には四つの段階が見られ、多くの人は最初の段階かその次の段階の内省実践をしているのではないかと思う。

最初の段階は、最もシンプルなものであり、それは内省を全くしないという段階だ。あるいは、内省の実践方法がわからなかったり、内省の機会がなかったり、内省を行うことができないような段階だと言い換えることもできるだろう。その次の段階は、内省のワークショップなどに参加し、形だけの振り返りを行うような段階である。この段階については、本書の中でも取り上げていたように思う。つまり、内省というものを単なる感想報告で終わらせてしまうような傾向を持っているのが、この段階の特徴である。

もちろん、振り返りを全くしないという最初の段階に比べれば、振り返りをする分、この段階の内省実践は、自らの内面の成熟や能力の成長に少なからず貢献をしてくれるだろう。しかし、本書の中で指摘したように、この段階の内省実践は、真の意味での内省ではない。

日本の内省ワークショップに参加したことのある知人から話を聞くと、それが単なる感想報告会になってしまっているということを聞き、それはまさにこの段階に留まる形で内省実践が行なわれているからだろう。この段階の次の内省段階に到達して初めて、内省実践と呼ぶにふさわしい内省が行なわれるようになる。

それは、「自分はこの体験から何を学んだのか？どのような気づきや発見があったのか？」という単なる振り返りを超えたものである。認識論者かつ発達心理学者でもあったジャン・ピアジェの言葉を借りれば、「内省的抽象化(reflective abstraction)」を伴う内省実践が行われるのが、三つ目の段階の特徴である。この段階の内省実践は、自己の認識の枠組みそのものや意味構築装置そのものを検証する特徴を持つ。例えば、「この体験から学んだ～は、自己のどのような認識の枠組みからもたらされたものなのだろうか？この発見を重要だと思った、自分の思考の枠組みの特性は何か？」というような問いを自らに投げかけるような特徴を持つ。

さらには、自らの思考の枠組みの特性に気づくことだけでなく、それを批判的に捉え直すことを促すような問いを自らに投げかけていくような特徴を持つとも言える。要するに、単に自己の認識の枠組みや意味構築装置の存在に気づくだけでなく、それそのものを変容させていくような批判的問いを自己に投げかけることができるような段階なのだ。内省を取り巻く日本の状況を見ていると、この段階の内省実践を行っている人はほとんどいないだろう。

実は、さらにもう一つ内省段階があり、その段階を通じた内省を行っている人は皆無だろう。最後の段階においては、自己の認識の枠組みや意味構築装置そのものが何に立脚しているかを問い、それらが必ず社会の文化的かつ制度的な枠組みに影響を受けていることに気づき、そうした社会的な発想の枠組みや制度そのものを批判的に検証するようなことがなされる。

私たちの認識や意味構築活動は、絶えず社会の思想や制度と相互作用をしている。最後の内省段階で待っているのは、自らを呪縛するそれらの社会的な発想や仕組みに自覚的となり、それらを

批判的に検証することを通じて、新たな社会的な発想の枠組みや制度の確立に向けて行動を取る
ことである。

内省というのは、自分の頭の中だけで完結するような実践ではなく、真の内省実践は、社会に積極
的に関与したものだと言えるだろう。そうした意味において、上記で紹介した最後の段階の内省実
践こそが、真の内省だと言えるのではないだろうか。2017/7/4

1256. 冷夏に思う冬と環境による発達

少しばかり寒さを感じさせる七月の朝。今日は早朝に、デイヴィッド・ウィザリントンの論文を三本ほ
ど読むことから仕事を開始した。これらの論文はどれも、発達科学を取り巻く思想的立場の分類と
整理を第一目的とし、そこからどのような思想的枠組みを持って発達科学の研究に従事するべきな
のかを提言している。特に、最後に読み進めた論文では、哲学的な用語が多く用いられ、論文の
内容が発達科学に関することであったとしても、それを読み進めることはそれほど容易ではなかつ
た。

しかし、これらの論文は、今後私が発達科学のメタ理論的研究に着手する際に貴重な文献となるだ
ろう。この夏、ダイナミックシステム理論を発達研究に適用することに関して、科学的な論文のみな
らず、哲学的な論文を多数執筆しているポール・ヴァン・ギアートの論文を数多く読むことによって、
ウィザリントンの主張がより明確になっていくだろう。

今日の天気は晴れ時々曇りとのことであり、早朝から複数の断片的な雲が空を覆っている。辺りを
照らす太陽の様子を観察してみると、晴れよりも曇りの方が割合が多いように思える。

昨年私がフローニンゲンの街にやってきたのは、八月の頭であった。その頃は、日中は暑さを感じ
ることがあった。フローニンゲンの年間気温において、八月よりも七月の方が暑いはずなのだが、相
変わらず朝夕は寒さを感じる。今年は冷夏なのだろうか。

今の私を取り巻いている自然環境は、私がこれまで夏に対して抱いていた印象とはかなり異なる。
これは良い意味でも、季節に対する自分の認識の枠組みを捉え直すきっかけになったようだ。夏ら
しさを感ぜないことを気にかけっていると、たいていの場合、もう少しすると自然は、私の心配が杞憂

であったかのように暑さをもたらすだろう。いずれにせよ、夏らしさを感じることのできる期間はそれほど長くないかもしれない。

短い夏が終わればすぐに秋となり、その秋も短いだろう。そうすれば、その次にやってくるのは、あの張り詰めた、凜とした世界を創出する厳しい冬である。奇妙なことに、私はあの過酷な冬の自然環境を恋しく思っている。あの厳しい自然環境の中で、自分の存在を再び濃縮することを強く熱望しているようだ。

太陽を覆っていた雲がどこかに消え、辺りに太陽光が再び照り始めた。通りを行く人の中に、自転車を運転する小さい子供がいた。おそらく3歳ぐらいの子供だろうか。何気なくその子供が自転車を運転している様子を眺めていると、驚くことに気づいた。

その子供は本当にまだ小さいのだが、何と補助輪をつけることなく自転車を器用に運転しているではないか。その姿を見たとき、オランダという自転車文化が浸透した国の環境力について思わずにはいられなかった。そういえば以前、マライン・ヴァン・ダイク教授か私のメンターであるルート・ハータイ教授と雑談をしていたときに、オランダではとても小さい時期から自転車の訓練を開始するという話を聞いた。

確か、その時の話では3歳ぐらいから自転車を遊びとして乗り始めるということを聞いていたが、まさかその年齢から補助輪を外すとは思ってもみなかった。私は、通りを行くその子供を何気なく眺めていただけだったので、危うくこのことを見逃すところであった。

小さな少年が自転車を乗り回している姿は、強引な訓練によるものではなく、彼が遊びを通じて自転車に乗る能力を獲得したことを物語っていた。自転車を活用するというオランダの文化的環境が知らず知らず、今日の前を通り過ぎていった小さな子どもたちの能力を自然と育んでいることに改めて思いを馳せていた。これは、置かれた環境が人間の能力を育む一つの好例だった。

あと数ヶ月したらやってくる過酷な冬に再度自分自身を置いてみた時、私の内側で今度は何が育まれるのだろうか。2017/7/4

先週から今日にかけて天気があまり優れなかったが、今日は一日を通して良い天気だった。午前中の仕事を終えたところで、近所のノーダープラントソン公園へランニングに出かけた。ここ数日間、書斎にこもりっぱなしであったため、久しぶりに外に出て自然の空気を吸うことは大変心地よかった。自らの思考状態を維持促進していくためには、定期的な身体運動は欠かせない。

自宅からノーダープラントソン公園へ向かう最中、運河をかける橋が、通行するクルーザーのために開かれていた。運河を優雅に去っていくクルーザーには、数人の人が乗っており、このような天候の中クルージングをすることはとても爽快だろうと思った。

フローニンゲンの現在の気温は高くないが、それでも季節が夏であることは確かであるため、ここ最近、運河を通行するクルーザーの数が増えているように思う。実際に、最近は運河を通る際に、橋の開閉に捕まる回数が増えている。こうしたことから、オランダの夏を感じることができる。運河の手前で橋が閉じるのを待っていた私は、ただぼんやりとそれを眺めていた。

何かを考えることもなく、ただ身体を少し動かしながら、橋が閉じられるのを待っていた。橋が閉じられるや否や、再びランニングを開始し、目的地のノーダープラントソン公園へ到着した。公園の木々の隙間から太陽光が差し込み、その中を私はゆったりと走っていた。木漏れ日に包まれながら、公園内の一角にある少しばかり深い森林を眺めた時、自分の身体のエネルギーが充電されるような感覚があった。

ここ数日の日記で書き留めていたように、書籍の出版後、無駄にエネルギーが漏れていくことを痛感していたため、森林がもたらしてくれたこの恩恵はとても有り難いものだった。走ることと相まって、自然の豊かさと恵みを感じることは、日々の生活を充実させる上で不可欠なのだと改めて知る。

ノーダープラントソン公園を抜け、フローニンゲンの街の中心部に向かうにつれて、思考が先日の鈴木規夫さんとの対談の内容に向かった。対談の最後に、鈴木さんが指摘していたように、日本の人財育成においては、その道の専門的な鍛錬を積むことなく、誰でも人財育成に携われるというような錯覚がある。これは人財育成に限らず、日本の企業社会においては、他の領域においても見られる傾向である。例えば、大学時代に一切情報システムに関する知的鍛錬を積んでいない者が――

下手をすると文系の学士号を持つ人間が——、企業に入っていきなりシステムエンジニアとして働き出すような現象が見られる。

これは欧米人からすると極めて奇妙であり、基本的に欧米の企業社会では、そのような形で職を得ることはほぼ不可能である。実際に、人財育成の職に携わろうとする大学院の友人に話を聞くと、産業組織心理学やMBAの専門学位がなければそうした職は得られないということであった。

おそらく、システムエンジニアにせよ、企業の人財育成担当者にせよ、それを専門とする部署に配置されることによって、実務手順に関する知識を獲得することはできるだろう。しかし、単純に仕事をこなす中では、その領域に関する深い専門知識を獲得することは、よほどの努力がない限り不可能であるように思える。システムエンジニアリングの背後にはシステム工学があり、人財育成の背後にはそれに対応する諸々の科学分野がある。とりわけ、人に関係する人財育成において、人の成長に関係する深い知識が欠落していることは、とても大きな問題だろう。

拙書『成人発達理論による能力の成長』で紹介することができたのは、人の成長プロセスやメカニズムの一端に過ぎないが、それでも、いかに人の成長が複雑であるかが少しでも伝わり、人財育成に関する深い知識を獲得する必要性に気づいてもらえることができれば幸いである。2017/7/4

1258. 近未来を訪れる夢

昨日の夢の印象を携えたまま、先ほど起床した。寝室に朝日が差し込むことはなかったため、どうやら今日は曇りであることがすぐにわかった。寝室の窓を開けると、今日は小鳥の鳴き声ではなく、ハトの鳴き声が聞こえた。その鳴き声の音は低く、そして重たかった。

寝室から書斎に向かう最中、昨日の夢の内容を思い出していた。夢の中で私は、ある二つの地点を高速で移動する乗り物の中にいた。最初私は、その乗り物が上下動するエレベーターのようなものだと思っていた。その乗り物の動きが止まり、外に出た時、景色の視線の高さが変わったのではなく、全く別の景色が広がっていたことから、その乗り物は左右のどちらかに動いていたことがわかった。

到着した地点で何をしていたのかは覚えていない。だがそこは、現代社会の都市とは似ても似つかない、より科学技術の進んだ都市のようだった。その時、あの乗り物は、現在から近未来に運ぶタイムマシンのようなものだということに気づいた。その気づきを得ることが、ここへ来た唯一の目的であったかのように、それに気づいた私は、すぐさまあの乗り物に乗って、もとい世界に戻ることにした。

あの乗り物に乗れる駅のような場所に到着し、再び乗り物の到着を待っていた。それはすぐにやってきて、一つの小さな個室のようなその乗り物に乗り込んだ。それに乗り込むと、すぐさまそれは出発し、もとい世界に戻り始めた。今度はその乗り物が進行する向きと動きが確実にわかった。と言うのも、私が座った向こう側の壁がガラスになっており、ガラス越しに外の様子が見えたからである。

外の世界は晴れ渡っており、薄青色の空が広がっていた。景色を見ながらその乗り物に乗っていると、辺りには人はおらず、複数の個室が連なったその乗り物に乗っているのは私だけのように思えた。しかしながら、私は間違いなく、その個室の中で別の人間と話をしていた。だが、その人間の姿形は見えなかった。

終着地点である、もとい世界が見えてくると、それはこの現代社会でよく見かける何の変哲も無い駅だった。線路の上を歩道橋が通っており、そこに人影が幾分見えた。その瞬間、夢の場面が変わった。

夢の第二幕では、最初の夢の内容を引きずっているかのようだった。それは夢の世界の情景に関することではなく、自分が近未来に足を運んだことにより、この世界を見る認識のあり方が変容しているようだったことから、二つの夢はつながっているように思えた。その影響はあまりに強く、主観的な世界での認識のみならず、物理的な世界での私の認識までも大きく変容させ、私はまるで酩酊状態のようだった。私は大学時代の友人と一緒に一つの目的地に向かって歩いていた。

しかし、あるところから友人とはぐれてしまい、私は友人が進む方向とは全く逆の方向に一人で歩き出していた。正直なところ、自分が全く逆の方向に歩き出したことは何となく気づいていた。だが、その足を止めることはできず、ふらふらとしながら大きな国道の歩道を歩いていた。あるところまで歩

いた時、自分が目的地と逆の方向に進んでいることが完全に自覚され、友人にも迷惑になるだろうから、来た道を引き返すことにした。

その後、私はおぼつかない足取りで長時間歩き続けていた。目的地らしき場所に到着する前に、大量の砂の山が築かれた空き地の存在に気づいた。その空き地に足を踏み入れると、私はこけてしまい、口の中一杯に大量の砂利が入った。だが、私はそれをその場で吐き出すことをしなかった。

そのまま目的地に到着し、友人に声をかけようとしたが、大量の砂利が口に入っているため、声など出しようがなかった。洗面所のような場所で砂利を吐き出し、口をすすぎながら、砂利が全て外に出るようにした。その後もいくつかの場面が続いていくが、それらの記憶は断片的なものになってしまっている。近未来に足を運んだ最初の夢と、そこから戻ってきた後の夢の中の現実世界に関する夢は、一つのつながりを持っているようだった。2017/7/5

1259. 観察ではなく鑑賞を

今日は完全に曇りのようである。雨雲ではなく、薄い雲が空全体を覆い、それは太陽の光を完全に遮断している。

通りに植えられた木々の葉が静かに動いているのが見えるのだが、それを生じさせている風をそよ風と形容することがためられる。太陽の光が燦然と降り注ぐ日であれば、それは間違いなくそよ風と私は呼ぶであろうが、今日はそのように呼びたくなかった。

随分と長い間気に留めていなかったが、書斎の窓の向こう側には、赤いレンガ造りの家々が並んでいる。それはどれくらい歴史のあるものなのかわからない。はっきりと言えるのは、このようなレンガ造りの家は日本では滅多に見ることができないということである。そのようなことを考えていると、そのレンガ造りの家々が、重厚感を持って景色の中に存在していることに気づいた。

これに気づいてしまった以上、私はもはや、書斎の窓から景色を眺める際にこれらの赤いレンガ造りの家々を無視することはできないだろう。これからオランダのこの地で過ごす毎日において、私は通りに植えられた木々だけではなく、その上に広がる空だけではなく、この赤いレンガ造りの家々を

絶えず観察することになるだろう。いや、それら三つで織り成された景色を観察するのではなく、それらを鑑賞すると述べた方がいいかもしれない。客観的な眼を通じて対象を観察するのではなく、主観的な眼を持ってそれらを鑑賞するのだ。

鑑賞には観察にない、自己の存在と対象との相互作用がある。自己の内側が変化すれば、鑑賞対象も変化する。鑑賞対象が変化すれば、自己の内側も変化する。両者はそのような関係で結ばれている。そのようなことを考えていると、書斎の机の配置を今の場所にすることは正解であったように思えた。

実は当初、書斎の机は窓に面しておらず、白い壁に面していた。その状態の中で仕事を続けていく中で、ある時ふと、息が詰まるような思いに苛まれた。その時、これからは絶えず外の景色を眺めながら仕事をしようと思い、机の配置を変えることを思い至った。それ以降、私は絶えず窓の外の景色を眺めながら仕事に従事している。ふと視線を上げれば、そこには常に外側の世界が広がっている。このことがいかに私を支え続けてくれたことか。その恩恵は計り知れない。

量子的な時間単位で刻一刻と変化する外の景色は、それと同様の時間単位で変化する私の内側の世界と調和をなしている。この調和が、持続的な仕事を可能にしてくれているのだと改めて感謝の念を持つ。

今日は午前中に、ステファン・グアステロの“Managing Emergent Phenomena: Nonlinear Dynamics in Work Organizations (2002)”とゲラルド・ヤングの“Development and Causality: Neo-Piagetian Perspectives (2011)”に取り掛かる。前者は、非線形ダイナミクスと組織論を架橋するような内容になっており、本書を通じて、企業組織の課題に対して非線形ダイナミクスの概念や方法を適用する洞察が得られるだろう。後者は、800ページを超す大著であり、新ピアジェ派の発達理論に関する詳細な分析とヤング自身が提唱する独自の発達理論が紹介されている。

これは過去に一読をしているため、今回は特に、ダイナミックシステム理論に触れている箇所やカート・フィッシャーの理論に触れている箇所を中心に読み返したいと思う。書斎の景色に支えられる形で、とりあえず午前中はこれらの二冊に取り組む。2017/7/5

早朝、過去の日記を少しばかり読み返していると、メンタルモデルに関する話題について少し前に執筆していることに気づいた。ちょうど偶然、昨日のメモの中にも、メンタルモデルに関するものがあつたため、過去の日記を改めて興味深く読んでいた。

昨日と同様に先ほども、人や組織の成長に関与する際に、いかに洗練されたメンタルモデルを構築するかは非常に大切なことだと思った。ここで述べているメンタルモデルとは、概念モデルと理論モデルの両方を含み、それを構築するためには知識と経験が不可欠となる。知識と経験は、メンタルモデルの構成要素でしかないため、それらを一段高い次元でまとめあげる訓練が不可欠となる。その一つの手段として、これまで何度も紹介してきたように、内省実践や文章を書くという実践がある。

知識と経験を、自らの思考を持って絶えず組み合わせていくような作業に従事しなければ、私たちの知識と経験はいつまでたっても一つの総体に変容していかない。様々な試行錯誤を行い、あれこれと知識と経験を組み合わせる中で、一つの総体としてのメンタルモデルが徐々に構築されていく。

昨日、浴槽に浸かりながらふと思い浮かんでいたイメージは、外科医が手術のプロセスに関するメンタルモデルを持っていなければ、一切の手術が不可能となり、仮にメンタルモデルが欠如した状態で執刀に当たるのであれば、その手術は高い確率で失敗に終わるであろうというものだった。

洗練されたメンタルモデルを構築し、それを具体的な課題に対して適用していくことは様々な職業において重要であり、それはここで挙げた医療や企業経営のみならず、将棋やチェス、音楽の演奏、サッカーなどにおいても重要だろう。そのように考えると、私たちは何らかの仕事に従事する場合、絶えず自己のメンタルモデルを通じて仕事に携わっていると言えるだろう。

昨日も、極めて優れたメンタルモデルを構築して仕事に携わっている人を見かけ、多大な感銘を受けた。高度なメンタルモデルは、仕事を通じて私たちを感動させるような力すらも持っているようだ。確かに、高度なメンタルモデルを携えた医者や棋士の執刀は芸術的とさえ形容できるだろうし、そうした芸術性は棋士の棋譜やサッカー選手のプレーの中にも具現化されるものだ。

そのようなことを考えていると、己の知識と経験を高度な次元に昇華させていく試みそのものが尊いものに思え、その結果として獲得される高度なメンタルモデルを発揮した仕事は、極めて価値のあるものであり、人々に感動を引き起こしうるような力を持っているように思えた。

当然ながら私たちは、高度なメンタルモデルの負の側面についても注意をしなければならないが、メンタルモデルの価値を改めて見直す必要があるように思う。それほどまでに、現代人の多くは自己のメンタルモデルを鍛錬することなく、自らの日々の仕事に対して惰性に従事しているように思えて仕方ない。2017/7/5